

6. 体験学習プログラム ～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO活動センターは、学生が長期休暇を利用して国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地NPO・NGOなどとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を、夏季と春季の休暇期間に実施しています。

異文化間における相互理解と共生を学ぶ海外プログラムでは、本学の専任教員が企画・引率する1プログラムと、NPO・NGO団体が実施する海外のスタディツアーの中から採択した、学生にとって学びの多い3プログラムを実施しました。

また、海外に比べて費用面でも参加しやすい国内プログラムでは、地域のさまざまな課題に目を向け視野を広げる内容で、本学の専任教員が企画・引率するものを1プログラム、センターのボランティアコーディネーターが地域の団体と協力して企画するものを1プログラム実施しました。

全コースが終了した後に実施する参加学生によるふりかえりを兼ねた報告会までを一連のプログラムとしており、報告会を通じてプログラムで得た経験を共有し、各自がさらに学びを深める機会となるだけでなく、報告会に出席した学生が次回のプログラムの参加を考えるきっかけになっています。

	プログラム企画者・団体	行先	テーマ	実施日時・期間	人数
国内	ボランティア・NPO活動センター	滋賀県高島市	人と人、人と自然～エコツーリズムを通して「つながり」を学ぶ～	2018年 2月23日(金)～ 2月26日(月) 4日間	14名
	社会学部 教授 筒井 のり子	福島県	福島スタディツアー～福島「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聞き、そして「自分」を見つめる～	2018年 2月24日(土)～ 2月28日(水) 5日間	15名
海外	学内企画 経済学部 准教授 島根 良枝	インド共和国	教育NGOの活動を通じてインドの経済成長と社会発展について学ぶ	2017年 9月4日(月)～ 9月12日(火) 9日間	4名
	特定非営利活動法人 JIPPO	スリランカ民主社会主義共和国	スリランカスタディツアー～歴史と暮らしに触れる旅～手づくり紅茶とホームステイ～	2017年 8月31日(木)～ 9月8日(金) 9日間	4名
	学外企画 認定NPO法人アクセス —共生社会をめざす地球市民の会	フィリピン共和国	この旅だから、出会えた。貧困と幸せ、被災地、戦争と平和	2018年 2月19日(月)～ 3月2日(金) 12日間	5名
	ツナミクラフト	タイ王国	復興タイ体験ツアー インド洋大津波被災地で東日本大震災7年目を迎える	2018年 3月6日(火)～ 3月13日(火) 8日間	5名

○国内体験学習プログラム／滋賀県高島市【春季】

■参加学生	
日野萌絵子(法学部 法律学科 3年次生)	小松 右詩(政策学部 政策学科 3年次生)
乗矢 隆良(政策学部 政策学科 3年次生)	須藤 昇汰(理工学部 物質化学科 2年次生)
新堀 萌(理工学部 環境ソリューション工学科 2年次生)	齋藤 未夢(社会学部 現代福祉学科 2年次生)
濱田 七海(社会学部 現代福祉学科 2年次生)	長瀬 朱理(農学部 植物生命科学科 2年次生)
藤川 はな(農学部 食料農業システム学科 2年次生)	橋本 昌尚(農学部 資源生物科学科 2年次生)
山田 京花(短期大学部 社会福祉学科 2年次生)	乾 佐枝子(社会学部 社会学科 1年次生)
瀬戸山瑠衣(農学部 食品栄養学科 1年次生)	渡辺 万葉(農学部 食品栄養学科 1年次生)
■テーマ、協力団体	
人と人、人と自然 ～エコツーリズムを通して「つながり」を学ぶ～ 高島市役所 マキノ自然観察倶楽部 社会福祉法人高島市社会福祉協議会 NPO 法人結びめ 滋賀県農政水産部水産課 滋賀県漁業協同組合連合青年会 他	

■行程 2018年2月23日(金)～2月26日(月) 4日間			
日時	行程	場所	
2月23日(金)	8:00	JR 京都駅八条口出発	マキノ／白谷地区 白浜荘
	9:30	白浜荘到着、荷物下ろしてすぐ出発	
	10:30	マキノ到着、オリエンテーション	
	12:30	昼食・休憩	
	13:30	高齢者・過疎化の話	
	14:30	高齢者との交流	
	18:30	夕食	
	20:00	一日のふりかえり	
	21:00	入浴・就寝	
2月24日(土)	7:30	朝食、ミーティング	土に学ぶ里研修センター マキノ高原 白浜荘
	9:30	そば打ち体験と移住者との交流	
	12:00	昼食・休憩・移動	
	13:30	スノーシュートレッキング	
	18:30	夕食	
	20:00	一日のふりかえり	
	21:00	入浴・就寝	
2月25日(日)	7:30	朝食、ミーティング	白浜荘 風結い／改修現場
	9:00	座学、高島市役所職員との意見交流会	
	12:00	昼食・休憩	
	13:15	古民家改修現場見学	
	14:30	NPO 法人結びめの取り組みについて、意見交換・交流	
	18:00	夕食	
	19:30	一日のふりかえり	
	20:30	入浴・就寝	
2月26日(月)	7:00	朝食、ミーティング	白浜荘 三和漁協 安曇川公民館
	8:00	三和漁港 漁船乗船、漁業見学、漁業の話等	
	9:30	琵琶湖についての話	
	10:15	調理実習(琵琶湖の魚を使っでの調理・交流)	
	12:30	昼食・休憩・片付け	
	14:00	4日間のふりかえり	
	18:00	JR 京都駅八条口到着、解散	

日野 萌絵子**(法学部 法律学科 3年次生)**

私は高島に行って、まちづくりには3つの「つながり」が大切であることを学んだ。まず「地域住民と行政のつながり」が大切である。まちづくりは行政と地域住民が一体となって行う必要がある。そのためにまちづくりに熱意のある住民をいかにして増やし巻き込んでいくかが求められる。また、来てもらえた観光客に長くその地域に滞在してもらうため「関係機関のつながり」が大切であること、そして、何度でもその地域に行きたいと思える「人」と出会う「人と人とのつながり」を作ることが大切であることを学んだ。1人の観光客が、その地域の人と出会い、地域の魅力を知り、リピーターになり、移住者となる。そのような流れを作ることがこれからのまちづくりに必要である。今回学んだ「つながり」のもと、どうすればより良いまちづくりが出来るのか、考え続けていきたい。



高島市マキノ町に住むおばあちゃんと交流しているところ

小松 右詩**(政策学部 政策学科 3年次生)**

本体験学習プログラムでは、高島市民の生の声を聞きながらエコツーリズムについて考えることができました。現地で観光資源になりそうな活動を実際に体験しながら、地域住民と一緒に考えることに大きな意味があると感じました。これは、本体験学習プログラムならではの経験といえます。高島市は自然環境が豊かな地域であり、それを生かしたまちづくりを考えることが今回のテーマでした。そんなエコツーリズムを考える上で、人と人、人と自然のつながりを意識する必要がありました。人間は自然の恵みを授かって命をつないでいますが、都市に暮らす人々はそのことを忘れがちです。水や食べ物、木材などもお金を払えば手に入ると思っ

てしまいます。高島市のような農村地域での体験学習は、そんな自然の恵みの大切さを思い出させてくれるものでした。高島市でのエコツーリズムが形になれば、単なる観光に留まらず、生きる上で大切なことを知るきっかけにもなり得る可能性を秘めていると感じました。



マキノ高原にてスノーシュー体験。地獄坂と呼ばれる斜面から琵琶湖方面を見下ろす

乗矢 隆良**(政策学部 政策学科 3年次生)**

琵琶湖の北西に位置し、湖を含む面積は県内で一位であり、人口49,168人で高齢化率33.5%（平成28年10月1日）である滋賀県高島市。豊かな自然に恵まれ、どこか懐かしい原風景が残っている市である。地元の高齢者の方との交流、そば打ち体験や琵琶湖での漁の見学、普段経験できない内容が盛り沢山だった。今回の体験学習で目の当たりにした高齢化という社会課題。しかし、その課題がある一方で、人のつながりの強さに触れることができた。つながりの強さは、高齢化に伴う移動手段の確保の困難さをはじめとする様々な課題にアプローチできる可能性を秘めていると感じた。また、私自身の地域とのつながりについて改めて考える機会となり、今後は地域のイベントに積極的に参加しようと思った。遠くの親戚より、近くの他人。つながりの強さは、その地域の活力となる。



そば打ち体験。熱血指導のおばあちゃんと

須藤 昇汰

(理工学部 物質化学科 2年次生)

今回の活動地である高島市は、自然豊かな土地を持つ魅力的な市である。しかし、高島市内の自治会の半数以上が限界・準限界集落であるという問題を抱えている。プログラムでは、このような高島市の課題を市役所職員や地元の方々がどのように解決していこうとしているのかを聞き、自分たちならばどう解決するのかを話し合った。四日間のプログラムを通じ、高島市の大きな課題は、高島市の魅力を地元の方々が知らないことではないかと考えた。高島市の魅力を知るためには、今回行ったような体験学習を地元の学校などで行うことによって、地元の魅力を発信していくことが重要である。また発信だけではなく、魅力に携われるような仕事を教えることも重要である。つまり、一次産業人口の増加のための活動が、高島市の自然の魅力を失うことなく、過疎化等の問題解決の糸口になるのではないかと考える。



漁業見学で獲れた子アユ、内臓ごと食べられる子アユは琵琶湖以外にほとんどない

新堀 萌

(理工学部 環境ソリューション工学科 2年次生)

国内体験学習プログラムでは、4日間の中で高島市だからこその体験をしたり、様々な立場の方に話を聞いた。そこから感じたことや思ったこと、考えたことを意見交換し、高島市の良いところやこれからのことについて考えるということを行った。高島市は自然との距離が近く、生活と密接しているところがある。慣れるまでは不便に思うかもしれないが、都会のように慌ただしく窮屈で騒がしくないところは憧れた。住民は生き生きとしていて、自分のライフスタイルを重視した生活を送っている人が多く、縛

られていない感じが少し羨ましく思った。話を聞き、意見交換をする中で自分の視野の狭さを痛感させられたり、新しい角度からのものの考え方や知らなかったことを教えてもらったりした。普段の生活ではこのような機会はないため、とても良い経験となった。今回学んだこと、自分に足りないものを再確認し、これからの人生に活かしていきたいと思った。

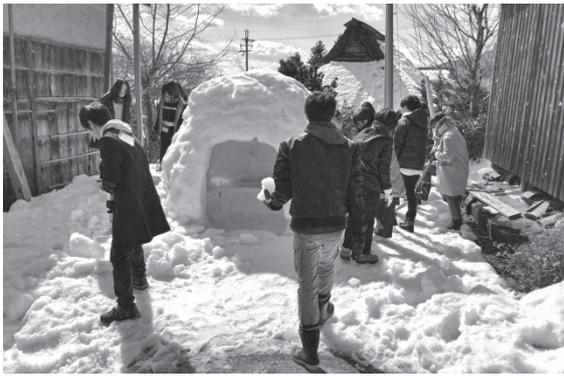


エリ漁のつぼの部分の様子。FRP製の杭と網の通路で魚を誘導し、つぼに集めた魚を獲っている

齋藤 未夢

(社会学部 現代福祉学科 2年次生)

最初の活動としてかまくらづくりをしました。そこで、雪かきがとても重労働だと思いました。仕上げに60歳の方が次々に雪を持ち上げ、整えてくださいました。60歳でも高島では若者として活躍しているんだと感じました。地元の高齢者との交流で、店や病院までの距離は車で20分くらいだと話されていました。運転が出来なくなると暮らすのにとっても不便だろうなと思いました。スノーシュートレッキングでは、足が雪に埋まっていき、楽しかったですが、足を抜く時、雪が重く抜きづらかったです。災害時、雪深い土地で足腰の弱った高齢者だけの避難は難しいなと思いました。市役所の方から、災害時に色々な場所に駆けつけなければいけない時に、地元で長く住んでいる職員は頼りになるというお話を伺いました。高島では高齢者が元気に生活されていました。しかし、あまり動けなくなると生活がしづらくなること、災害時は高齢者だけでは対処が難しいことを実感しました。地元の若者の力が災害時に重要なことを知りました。高島で若者が求められている役割は大きいと感じました。



みんなで、かまくらを直している様子

濱田 七海

(社会学部 現代福祉学科 2年次生)

高島の体験学習プログラムに参加して特に印象に残っているのは、移住してきた方々の話である。一口に移住者と言ってもその年齢、思いは様々であった。定年退職後にのんびり暮らしたいと来た人もいれば、都会でお金を稼ぐだけの楽しくないサラリーマンをやるよりも、安い賃金でも好きな仕事をして、自分で生きる力を身に付けたいと思って移住してきた人もいた。そのような様々な方のお話を聞くことができた。中でも高島で3人の子どもの育てるお父さんの姿が特に印象深く、薪ストーブや湧き水を汲んで生活されており、不便はあるかもしれないが、本当にそれを楽しんで暮らされているのだなと感じた。お話を伺ったみなさんは、高島を愛しているなと感じた。それだけの魅力が高島にはあるということだ。住民の中には、地域を盛り上げるために様々な活動をしている人もいれば、地域の魅力に気づいていない人も少なからずいるようであった。高島の魅力を、住民の方々にはもちろん、他地域の人にも知ってもらい、盛り上げていくことができれば良いなと思った。



移住者の方にそばの打ち方を教わっている。作業をしながらも様々なお話をさせていただいた

長瀬 朱理

(農学部 植物生命科学科 2年次生)

国内体験学習プログラムを通して、高島の多くの魅力を発見すると共に、地元のまちの魅力についても再発見することが出来ました。高島は恵まれた自然を基盤として多くの人々がまちづくりに携わっており、自然環境はもちろのこと、人にも恵まれているという印象を受けました。私は、高島が発展していくためには、ある程度都市化することは避けられないと思っていました。しかし、今の自然の中で生活を営む人がいて、またそれを好んで移住してくる人がいる以上、安易に都市化などと考えるのは良くないということに気づかされました。地域資源の発掘を行い、それを最大限に活かしていく、そんなまちづくりが大事だと感じました。私たちが今回高島やそのまちづくりについて学べたことはとても意義のあるものですし、感じたことを地域の方に伝え、共に学び合う関係であったことは、互いにとってとても良かったと思います。このような交流が全国的にさらに増えると良いと考えます。



メタセコイヤ並木。ツーリング客が高島でお金を落とすくれない、近所の人に迷惑など問題がある

藤川 はな

(農学部 食料農業システム学科 2年次生)

この国内体験学習プログラムで、たくさんの人に出会い、いろんなお話を聞くことができました。中でも一番印象に残ったのが、空き家改修をされている福井さんの言葉です。「お金を出したら何でも買える時代になってきて、お金を稼がなきゃという考えが当たり前になっているが、それらを自分で作ることができ、自分のその日の作業の結果によって人生が変わることが面白い。」と話されていました。自分のやりたいことを仕事にして人生を楽しんでおられる姿がとても印象深く、私もそういう生き方

をしたいと改めて思いました。来年に就職活動を控える中、まだ将来について明確に決めていなくて迷っていましたが、今回このお話を聞いて、福井さんのように自分の本当にやりたい仕事をしようと思いました。



空き家改修の見学の様子

橋本 昌尚

(農学部 資源生物科学科 2年次生)

今回の4日間の国内体験学習プログラムに参加し、多くの方と出会い、意見交換していく中で学んだことがあります。それは地域創生には行政の力だけでなく、地域の人々と行政と協力することが必要だということです。市役所や県の職員、住民の方々とお話の中で、行政だけがただ頑張るだけではうまくいかず、住民との協働が大切なのだと気づきました。地域の歴史や場所、そして課題など、住民だからこそ知っていることや気づけることがあります。そのため、地域の人たちを巻き込み、協力し合うことで地域の生活の向上や雇用創出、環境の保全につながるということを学び、地域との関わり的重要性に気づくことができました。この体験を通し、実際に地域の魅力をこの目で知った私たちが、それを伝え行動していく必要があると思いました。



高島市役所の方々との意見交換

山田 京花

(短期大学部 社会福祉学科 2年次生)

今回滋賀県高島市の国内体験学習プログラムに参加して感じたのは、人と人との繋がり的重要性です。訪問する先々でその場所を大切に思う人たちの話を聞くことができました。高島市へ移住された方もいれば週に何回か高島市へ訪れるという方もいらっしゃいました。今まで私は一つの仕事をし続けることが普通だと感じていましたが、お話を伺った人のほとんどが一つの仕事をする傍ら農家をしたり、趣味を仕事にしたりと自分がやりたいと思ったことを楽しんでやっておられました。そして、誰かと助け合いながら自分の意思でやりたいことを決めていらっしゃるの印象的でした。ボロボロだった空き家をまた住めるように改修作業をする現場では、大工の経験もない一般の方を募集して家づくりをみんなでやっておられました。誰かに任せるのではなく、自身の手でものを作り上げるといふ実体験をととても大切にされていました。この四日間で伺った話をはじめ、それを話される方々の表情や姿勢がとても素敵で、惹かれるものがありました。そのときの様子をまた誰かに伝えたいと強く感じました。



漁で捕れた魚を地元漁師さんから教えてもらいながら調理した

乾 佐枝子

(社会学部 社会学科 1年次生)

高齢者の方から大学卒業したての市役所職員の方まで、幅広い年代・立場の方々との交流できたおかげで、様々な視点で高島市を見ることができた。高島市のまちづくりをどのように進めていけばよいのか、行政の方だけでなく地域住民の方までもが、そのことを真剣に考えていることにとっても驚いた。住民のみなさんがしっかりと意見を持っていて、自分たちの暮らす高島

というまちが本当に好きなんだなということが伝わってきた。自然保護・観光公害・少子高齢化など多くの課題と直面しているにもかかわらず、生き生きとして笑顔の絶えない住民の方たちを見て、たくさんの元気をもらった。豊かな自然や人と人のつながりなど、今ある高島市の魅力をもっと多くの人に知ってもらえるよう、これから伝えていきたいと思う。



一日目、地域の高齢者の方々との交流。昔の暮らしや高島市の特産品を楽しく教えてくださいました

瀬戸山 瑠衣

(農学部 食品栄養学科 1年次生)

事前学習会で、多くの集落は限界集落だと聞いていたため、高島市はあまり活気がなく静かな地域というイメージを持っていました。しかし、実際に高島市を訪れ、高齢者の方と交流したり、古民家改修の現場でお話を聞いたりしていくうちに、印象が変わっていきました。高島に住んでおられる方は、高島での田舎暮らしに誇りを持って生活しておられるのだと感じました。スノーシュートレッキングを体験し、降雪



古民家改修の現場を見学し、セルフビルディングについてのお話を聞きました

量の多い高島では雪で悩まされることもあるけれど、雪が魅力にもなることがわかりました。豊かな自然や雪などの高島のたくさんの魅力は、それを伝えたり、紹介したりする地域の人がいるからこそ、引き出されるのだと思いました。高島の国内体験学習プログラムに参加することで、高島の社会問題について理解を深め、現地でたくさんの人と接して、活気ある地域の雰囲気を感じ、人と人とのつながりの大切さを学ぶことができたと思います。

渡辺 万葉

(農学部 食品栄養学科 1年次生)

このプログラムでは様々な方とお会いしましたが、どの方も高島に対する熱い想いを語ってくださいました。山が近い、水がきれいなど、高島の自然に惹かれて移住される方が多いようです。スノーシュートレッキングでは、スノーシューを靴に取り付けることによって、雪上を簡単に歩き回ることができます。琵琶湖と山を五感で感じました。高齢者が多い高島市は、地区ボランティアや見守りネットワークなどの仕組みがあり、皆で支えあっておられます。NPO 法人結びめさんは移住希望者等に空き家の直し方講座を開かれています。これらのことから人のつながりの重要性を強く感じました。四日間、高島について考えることで、自分は将来、どこで何をしたいかを考えるきっかけになりました。私も高島の方々のように、胸を張って好きだと言える地に住みたいと思いました。そしてその地をより良くするために周りの人と積極的に関わりあっていきたいです。



スノーシュートレッキングの様子。ふかふかの新雪の上でも沈まずに歩くことができる

○国内体験学習プログラム／福島県【春季】

■参加学生	
今井 敦 (法学部 法律学科 3年次生)	柿本 弦希 (理工学部 情報メディア学科 3年次生)
西山 大樹 (政策学部 政策学科 3年次生)	坂本 唯 (国際学部 グローバルスタディーズ学科 3年次生)
土橋 茉奈 (文学部 歴史学科 2年次生)	村井 俊介 (文学部 歴史学科 2年次生)
坂田 泉 (社会学部 現代福祉学科 2年次生)	福田のののか (社会学部 現代福祉学科 2年生)
織田香朱美 (政策学部 政策学科 2年次生)	下岡 祥人 (短期大学部 社会福祉学科 2年次生)
朝倉 勇人 (社会学部 現代福祉学科 1年次生)	大橋 寛海 (社会学部 現代福祉学科 1年次生)
馬場 夏海 (社会学部 現代福祉学科 1年次生)	大平 早葵 (政策学部 政策学科 1年次生)
武田ゆりな (政策学部 政策学科 1年次生)	
■テーマ、企画・引率教員	
福島スタディツアー ～福島「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～ 社会学部教授 筒井 のり子	

■行程 2018年2月24日(土)～2月28日(水) 5日間		
日 時	行程	場 所
2月24日 (土)	8:00 京都駅八条口に集合し、福島に向け出発	京都市
	19:50 宿に到着 NPO 法人うつくしまランチの皆さんと夕食&交流会 ランチの活動や震災の様子などについて話を聴く。	福島市 【ユースゲストハウス ATOMA・泊】
2月25日 (日)	9:00 阿部農園を訪問し、発災後、安全な農作物を作るために行った取組などについて話を聴く	阿部農園
	飯館村のまでい館(道の駅)経由で南相馬市へ移動	福島市～南相馬市
	12:30 南相馬市道の駅で昼休憩の後、浪江町へ移動。	道の駅「南相馬」
	13:00 浪江町在住の小林氏の案内で、浪江町内をまち歩きとバス移動で見学しながら町の現状について話を聴く。あおた荘も訪問。	浪江町内
	15:30 デイさぼーと ぴーなっつ青田由幸氏を訪問し、津波や避難者の現状、現状福島で起こっている福祉的な課題を中心にお話について話を聴く。	デイさぼーと ぴーなっつ事務所
	17:15 宿に到着・ふりかえり	南相馬市【農家民泊 いちばん星・泊】
	19:00 夕食&ゲストの皆さんと交流する時間	
2月26日 (月)	9:00 農家民泊いちばん星の星氏から鹿島区域を中心に市内を案内していただく。	
	11:00 (株)小高ワーカーズベースの和田氏より、ワーカーズベースを創設したきっかけ、取組などについて聞くと共に活動現場を見学 南相馬市社協の佐藤課長から、現在の南相馬市の様子、社協の取組について話を聴く	小高浮舟ふれあい広場
	14:00 昼食休憩	東町エンガワ商店で購入
	15:30 『農家民泊いちばん星』の星氏に、市職員から転職し、民宿を開いたきっかけや震災時の状況について聴く	※南相馬市小高区内にある仮設店舗 農家民泊 いちばん星
	17:00 ふりかえりとデイサービスで披露するうたと踊りの練習	
	19:00 夕食	【農家民泊 いちばん星・泊】
2月27日 (火)	9:20 南相馬市内の視察 銘醸館にてガイドと合流～防災センター～原町沿岸～小高区沿岸～小高区ガレキ置き場～大悲残の石仏(下車・視察)～雲が原祭場(車窓)～銘醸館にて解散。	南相馬市内
	12:00 昼食休憩	
	13:30 いきいきデイサービス事業(小高区)へ参加 歌とダンスを披露し、ジェスチャーかるたで高齢者と交流。その後、同施設内で実施されているデイサービスにも訪問	小高保健福祉センター
	16:00 郡山温泉へ向かう。	
	17:40 休憩場所に到着・ふりかえり	郡山市【郡山温泉・休憩・夕食】
	19:00 夕食・入浴	
21:00 郡山温泉発	車中・泊	
2月28日 (水)	8:00 京都駅八条口着	
	8:15 深草キャンパス着	

今井 敦

(法学部 法律学科 3年次生)

メディアがもたらす情報は全てを物語りません。むしろ現地へ足を運ばなければ得られないものが多かったと思います。私たちが普段触れる情報は一部の切り取ったものであり、地元の方の話を聞くほど一つの意見だけでは収まりきらない「声」がありました。7年という時間は人によって感じ方が異なると思いますが、私としては「もう7年たった」という感覚です。しかし同時に地平線まで広がる黄土色の更地に工事車両が走る様子や帰還困難区域に点在する朽ち果てた建造物を目に焼き付けるとき、「まだ7年」という認識が変わったのです。

復興へと前を向く人々の心とは裏腹にあの時から時を止めたように静止した空間に対し、



阿部農園見学の様子

ら立ちともどかしさを覚えました。しかし現在の福島を将来の日本がたどる可能性（シナリオ）の一つと考えたとき、現地における課題は普遍的なものとしてとらえることができると思います。

柿本 弦希

(理工学部 情報メディア学科 3年次生)

実際に現地に行くことによって得られるモノはニュースなどで得るモノとは違って心に訴えかけてくるように感じた。特に現地に色濃く残っている傷跡は自分をそうさせるための要素となった。フレコンバッグの問題や太陽光パネルの問題などがあげられるが、現状解決ができない状態にあるのでこれからの課題というのも大量に残っているように感じる。

行動一つで生死が分かれてしまう当時の状況というのは人単位で起こっているもので、これから南海トラフなどのような震災が起きてしまった時に「てんでんこ」の思想を広く知ってもらいたいと考えている。

普通の人々が復興のために課題を見つけその解決のためにどうするかを考え実行している。その影響で、店がオープンし始めたり人が少しずつ増えてきたりなどの効果が出てきている。

若者が不足しているという状況なので、自分もその若者としてなにか貢献できればいいと思った。



大量に山積みされたフレコンバッグ

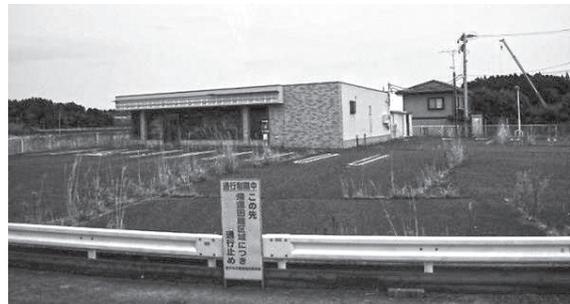
西山 大樹

(政策学部 政策学科 3年次生)

体験学習を通して感じたことを一言で言うと、「この気持ちの悪さ。それを伝えたい。」だ。

2日目、デイさぼーと ぴーなっつ 青田さんのお話を聞いて、私は言葉に言い表せない気持ち悪さを感じた。「津波はローリングで来るから人を粉々にする。」「東電は放射能が80km 飛ぶことを知っていた。」「Speediで東アジアを見てごらん。北朝鮮が赤くなっている。いずれ日本に訴訟を起こされるよ。」そんな話を聞き、それに続けて小児甲状腺がんや優生思想の話になってから私の頭は追いつけなくなった。話を聞いた帰り道、いろいろ自分の中で考えていると、この世のすべての事象が気持ち悪く思えた。

私は、今福島で起きていることが私たちと無関係なんて絶対に言えないと思う。福島から目を背けている現状は、大人のいじめと考えている。だから、私は無関係だと思っている人たちに向けて福島で今起きていることを伝えていく。



国道6号線から撮った帰還困難区域の写真。ここはコンビニだったのだろうか

坂本 唯

(国際学部 グローバルスタディーズ学科 3年次生)

「放射能が降っています。静かな夜です」(和

合亮一、2011、詩の礫より) 福島市在住の詩人である和合亮一さんが震災直後からツイッターで発信し続けた言葉によって私は震え、この現実を受け止めきれぬのか、とても不安な気持ちになったことを覚えています。

そのような不安は福島県に到着した夜にはすでに消え、辛い現状よりも食べ物がおいしく、自然が豊かで、人々が笑う明るい福島が見えました。

しかし私は言葉をなくします。津波によってほぼすべてのものが流されてしまった浪江町請戸。あの日のまま時間が止まったようにボロボロの状態に残っている建物や、かつて人々が住んでいた家。どうしてこんなことになってしまったのか、言葉にできない怒りとくやしさが涙に変わり、東京電力福島第一原子力発電所を睨みました。

悪者を決めつけるのは簡単だけれど、そうではない。なぜ原発事故が起こったのか、どのよ



福島県産の豚肉でしゃぶしゃぶを頂きました。他にも野菜やフルーツなどが絶品です！

うな力が福島県に原子力発電所をもたらしたのか。私たちは考え続けなければならないと思います。

土橋 茉奈

(文学部 歴史学科 2年次生)

今回のスタディツアーでは地元の方から直接お話を伺い、町を実際に歩きました。道路沿いに置かれた、黒いフレコンバックの山や仮設住宅、慰霊碑、放射線量を表す掲示板など、そのどれもが私にとっては見慣れない光景でした。福島では今でもこんなにも震災の痕跡を感じ取れることに、驚きを受けました。地元の方には、目を背けたくなる現実、希望ある未来へ向けた事業、と様々なお話を伺いました。

実際に東北地方に行って、ボランティアをされた方などからそのお話を伺うと、多くの方が「言葉にするのが難しい部分がたくさんある」と話されます。福島へ実際にいった今、その言葉の意味がよくわかります。当事者ではなくても、伝えるために話すこと、行動することが出来ます。関心を持ち続け、今私が知っている福

島を、東日本大震災を伝えることが、今の私に出来ることであり、したいことです。



梨農家の阿部農園さんの敷地内に積まれたフレコンバック

村井 俊介

(文学部 歴史学科 2年次生)

私は、福島県に住む人々が東日本大震災発生後どのような状況に直面したのか、震災や原子力災害からの復興にどう向かっているのか、自分の目で見て知りたいと思い福島スタディツアーに応募した。震災直後、テレビの画面に映る東北地方の映像は衝撃的で同じ国で起きていることと信じられなかった。しかし時間が経つにつれ日本で起きたことと感じ、同じ国で起きたのだから、自らの住む所が東北地方と同じ状況になるリスクはある程度抱えているかもしれないと思うようになった。また、メディアを通して東北地方の状況を見聞きすることは可能だが、生きる人々の目を見ながら言葉を聞くことは字面を追うことよりさらに現状を知ることができ、人々の気持ちを自分事として考えられるのではとっていた。このツアーで多くの人々の想いに触れた。2011年3月11日以降福島県で何が起こり、どう変化したのか情報を集めて知り、自分の中で考え続けたい。



請戸漁港の様子。福島第一原発から約7キロに位置しており、現在は試験操業をしている

坂田 泉

(社会学部 現代福祉学科 2年次生)

震災から7年が経ち、関連した報道も少なく

なっていく中で、実際この目で被災地の今を確かめたいという思いで参加したが、私が目にしたのは大量の土嚢や住宅の跡地にびっしり埋められた太陽光パネルなど「復興」という言葉には当てはまらない異様な光景だった。帰宅困難区域では地震直後の家がそのまま取り残され、避難所で生活している人も多く、その近くに依然としてそびえたつ原発を見ていると私は煮えくり返るような思いになった。そんな福島は今を生きる人々からのお話や活動の内容は深く印象に残っている。阿部農園さんや和田さんをはじめ、どの方も人とのつながりを大事にし、福島への愛着と誇りを持って活動されており、その等身大の姿は私の目にたくましく映った。震災は悲しみを生み出したが、それ以上に人々の復興への活力を彷彿させたのだと感じた。私はこの経験を記憶の中で留めず、風化させないよう人々に伝えていきたいと思っている。



車窓から見た大量のフレコンバック。福島にきて一番ショッキングな光景だった

福田 ののか

(社会学部 現代福祉学科 2年次生)

今回、私は、このスタディツアーで初めて福島を訪れました。まず初めに驚いたのは、震災から7年経った今でも、海の近くには何もなく、道路の横や、畑の一部に汚染土の袋が置いたままになっているということです。福島の方が、それをどうにかしなければ、と考えておられるのを聞き、今の福島に残されている問題は、福島の方だけの問題ではなく、私たちや行政も含め、全員で協力して考えるべきことだと気づきました。

また、原発のことについて、自分の意見を持つことも大事なことだなと思いました。今回福島に行き、色んな方からお話を聞きましたが、皆さんとても優しく温かい方でした。また福島を訪れたいです。また、今回福島を知るきっかけになったので、自分自身でもっと知識を増や

していけるよう行動し続けたいと思います。



南相馬市の津波の被害があった場所です。海の近くは建物がありませんでした

織田 香朱美

(政策学部 政策学科 2年次生)

スタディツアーに参加する前は、福島や震災に関して正直知識も関心もそんなになかった。しかし実際福島に行ってみて変わった。プログラムでは震災や原発事故について詳しい方、NPOを立ち上げた方、新たなビジネスを立ち上げた方、元市役所員の方、高齢者など様々な経験をされて、様々な考えを持っている方から話を聞いて多面的に学ぶことが出来た。中でも印象に残っているのは、福島から避難している人がいじめられていること、福島に対して偏見を持っている人がいるという話だ。



星さんの話を聞いているところ

4日間福島に行って震災のことすべてを知れたわけではないが、以前より関心が高まった。さらに、ツアーでの経験を出来るだけ多くの人に知ってもらって考えてもらいたいと思うようになった。私が語れることなんてちっぽけなことだと思うが、私が身近な人に語っていくことで福島へのイメージを少しずつでも変えていく手助けになればいいと思う。

下岡 祥人

(短期大学部 社会福祉学科 2年次生)

震災から7年たった今、メディアが震災に関する情報を報道することが少なくなった。これによって世間の人たちは被災地の復興は済ん

だものだと考えるだろう。しかし、実際現地は復興したとは言えない状態が続いている。

今回スタディツアーで福島を訪れたことによって私には福島の「今」を伝える義務があると考えている。福島の今を見て、福島に生きる人たちの話を聞いて、福島の地を歩いて感じた現状などをより多くの人たちに伝えていかなければならない。そのためにも今後も福島について考え続けなければならぬと感じている。

福島の人々は私たち若い世代に多くの大切なことを教えてくださった。この教えを忘れてはいけないとひしひしと感じている。また、福島で受けた刺激や経験を今後の学生生活に活かすだけでなく、今後の生きる糧にもしていきたい。



復興に対する町民の強い気持ちが感じられる漁港

朝倉 勇人

(社会学部 現代福祉学科 1年次生)

私が今回、福島県を訪れて特に印象的だったのは、風評被害と避難した人へのいじめの問題である。震災から7年が経とうとしているが、阿部農園で話を聞いて、未だに風評被害がなくなっていないことを知った。また国内だけでなく海外の人にも風評被害のイメージが払拭されていないということだ。私は、実際に福島県に行って福島県で採れた食材を食べてこのスタディツアーを過ごしたが、どれも美味しかった。実際に福島県で採れる食材の多くは放射能をしっかりと測って基準値を下回っているものを出荷販売されている。それでも、福島産というだけで放射能汚染のイメージのせいで今までのように買ってくれないそうだ。

次にデイさばーとぴーなっつ青田さんの話の中で、放射能の悪影響はいじめの原因にもなっていることを知った。なぜいじめが起きてしまうのか。それは、知らないからだと思う。震災で何があったのか、どれだけ苦労したのかを

知らないで、その人たちの気持ちを理解することができていない人がいじめをしてしまうと思う。

他の被災地とは違って、津波や地震の被害よりも原子力発電所の事故の被害が大きな傷跡を残していると感じた。

皆さんには、風評に惑わされないようにということと、今でも多くの人があの震災で苦しい思いをしているということをまずは理解していただき、福島県が今どんな状況なのか、たくさんの人に伝えていこうと思う。



放射能を測定する機械の写真。街中に設置されている

大橋 寛海

(社会学部 現代福祉学科 1年次生)

昨年9月に宮城県石巻市に訪問させていただいて、被災地の事について理解したつもりでした。しかし宮城県と福島県でも、さらに言えば各市町村でも事情がかなり違うという事を知った。被災地という単語で一括りにはできないそれぞれの復興に向けた課題があった。

福島は原発事故の被害を受けた。避難区域が解除されても人がなかなか戻ってこない、農産物の風評被害など他の被災地にはない福島独特の問題を抱えている。

これだけの多くの課題を抱えながらも今回お話を聞かせていただいた方々は復興に向けて様々な活動を行っていた。それを見て私は続けることをテーマに福島のお手伝いがしたいと思った。今回見たもの聞いたこと、それはどれも衝撃的でかつ、被災していない人は知らないようなものばかりであった。それを自分の中で色あせないようにするためにできるだけ福島に足を運び、そしてそれを身近な人を中心に伝えていくということを今後続けていきたいと思った。

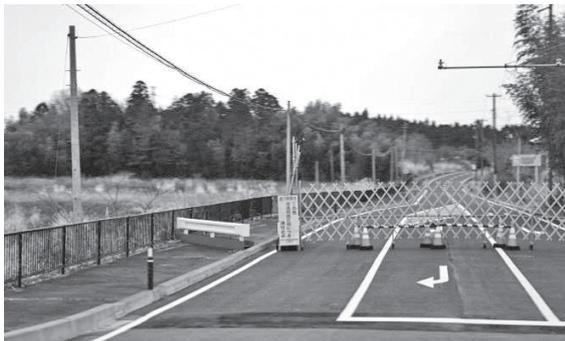


バス内から撮影した帰還困難区域の放射線量を示した写真。高い数値を記録している

馬場 夏海**(社会学部 現代福祉学科 1年次生)**

今回のスタディツアーで初めて福島県へ行き、人の生きていこうとする強さを感じました。しかし、明るい現実の裏側では人が生きてきた痕跡を津波と原子力発電所事故によって奪われたまま、時を止めた場所もあり、ここに住む人々の思い出が消えてしまうことになるのを悲しく思いました。当たり前が当たり前ではなくなる恐怖について学んだことです。

知らないことがいかに恐ろしいか、知らないことがどんなに幸せか、両極端である二つは大きな学びであると思います。知ること、学ぶことがいかに大切であるかを今回で身に染みて感じました。福島県で学んだ防災知識から発展して、さらに自分で学びを深めていくことが重要であり、さらに防災に関する知識をつけることも重要だと感じました。小さな一つの知識でも、人を助けたり、自分を助けられる可能性になることが今回の福島県スタディツアーの全体を通じて学んだ最も大きな点であったと思います。



写真は双葉町の現在の様子です。帰還困難区域で震災時のままであり、嚴重なバリケードに衝撃を受けました

大平 早葵**(政策学部 政策学科 1年次生)**

大きく分けて3つのことを述べたいと思います。まず1つ目は情報公開の在り方についてです。メディアを通して知らされてきた被災地の状況と実際に訪問し、現地の方から話を聞いて知った状況や情報にあまりにも差があり、本当に伝えられるべきなのは何だろうか、と考えさせられました。

2つ目は風評被害についてです。原発が原因で避難先でいじめに遭ったり、生産したものを購入してもらえなかったりなど、今も苦しみ続けている立場に置かれた被災地の方の苦しみを無くすためには私たちが変わらなければならないと思

います。また、風評被害は自分たちの行動次第で1番変えていける部分でもあると思います。

最後は、実際に被災地を訪問して情報を知らされる側から伝える側になったことについてです。プログラム参加後に家族に学んできたことを伝えてみたものの、全然うまく伝えられず歯がゆさを味わいました。これから自分の得意なことを活かして福島に関わっていきたいと思います。



津波被害に遭った請戸小学校

武田 ゆりな**(政策学部 政策学科 1年次生)**

今回、スタディツアーに参加させていただき、とても勉強になりました。

阿部農園さんでは、400本もある梨木の、皮をはいでいく大変さや未だに埋まっているフレコンバックの話などを伺いました。小高ワークスペースの和田さんには、自立した地域社会を目指し、再び人を集めるためにされている事業の話伺いました。

未だに残っている課題や今の復興状況・新しく始めていることの両方を知ることができました。やっぱり現地へ行き、現地の方の話聞いたほうがその情報は最新であり、視覚的情報も多く、何よりメディアだけでは知ることのできない中身を知ることができました。

このことを、もっといろんな人に知ってほしいです。伝えるというのはとても難しいことですし、私にはまだまだ知らないことが沢山あります。だから、まずは4月に学校で開催する報告会に向け、発表班の皆さんと一緒にしらべていき、多くの人に伝えられるよう頑張りたいです。



いきいきデイサービスへ伺った時の写真です。おじいさん、おばあさんたちに様々なお話を伺いました

○海外体験学習プログラム／インド共和国【夏季】

■参加学生	
清水 峻治 (法学部 法律学科 4年次生)	田中 綾香 (法学部 法律学科 3年次生)
松原 誠智 (理工学部 数理情報学科 3年次生)	神田 真菜実 (経営学部 経営学科 2年次生)
川下 諒 (政策学部 政策学科 1年次生)	
■テーマ、企画・引率教員	
教育 NGO の活動事例を通じて、インドの経済成長と社会発展について学ぶ9日間 経済学部 准教授 島根 良枝	

■行程 2017年9月4日(月)～9月12日(火) 9日間			
日程	時間	活動内容	場所
9月4日(月)	6:30	伊丹空港集合6:30	デリー
	8:00	伊丹空港 JL3002 (8:00) 発 成田空港 (9:20) 着	
	12:30	成田空港 JL749 (12:30) 発	
	17:35	デリー空港 (17:35) 着 【Villa33泊】	
9月5日(火)	午前	● ST. ANTONY'S SR. SEC. SCHOOL (ミッション系の女子教育一貫校) にて視察とヒアリング	デリー
		● Pratham (プラサム、成果を上げている教育 NGO) を表敬訪問・視察の詳細を打ち合わせ	
	午後	○ インド門、国会議事堂、官邸周辺を移動の途中で見学	
		○ ホテルにてミーティング 【Villa33泊】	
9月6日(水)	午前	● デリー大学サウスキャンパスにてヒアリング、大学学寮で懇親と昼食	デリー
	午後	● スラム地域 (バザントビハール) にて、居住者に対するヒアリングと地域内の視察	
		○ ホテルにてミーティング 【Home@F37泊】	
9月7日(木)	午前	● 商業地域 (INA 市場およびその周辺) にて視察とヒアリング調査	デリー
		● Delhi haat にて各州の特徴を学習	
	午後	○ コンノートプレイス、レッドフォート、オールドデリー、マーケット (KhanMarket) を視察 オールドデリーでは、一つの通りに様々な宗教の寺院が建っている様を見学	
		○ ホテルにてミーティング 【Home@F37泊】	
9月8日(金)	終日	● Pratham (プラサム) の活動3つのプログラムを視察 ①スラム街にあるプレスクール、②小学校内で行われる Library Program、 ③スラム街にある Learning Center での学習支援	デリー
		● Learning Center 周辺のスラム地域内で視察、子供へのヒアリング調査	
		○ ホテルにてミーティング 【Home@F37泊】	
9月9日(土)	終日	● 出稼ぎ労働者の集積地である Burari 村でヒアリング	デリー
		○ 高級なマーケット (Khan Market)、モティバークを視察	
		○ ホテルにてミーティング 【Villa33泊】	
9月10日(日)	終日	● 出稼ぎ労働者の大居住地域である Khoda 地域で視察とヒアリング調査	デリー
		○ ホテルにてミーティング、ガイドの Mr. Singh さんからヒアリング 【Villa33泊】	
9月11日(月)		● Pratham を再訪し、今回スタディツアーの成果を報告するとともに、日本の大学生にできる協力について意見交換	デリー
	19:35	デリー空港 JL740 (19:35) 発 成田空港 (7:25) 翌朝着	
9月12日(火)	7:25	成田空港着 リムジンバスにて羽田空港に移動	
	10:30	羽田空港 JL113発	
	11:40	伊丹空港 (11:40) 着 解散	

清水 峻治

(法学部 法律学科 4年次生)

今回の体験プログラムでは、その場所に行き、気候や匂い、雰囲気を経験することでしかわからないことがあること、子どもたちの教育において「場所」を作ることが重要であること、の2点が印象に残っています。9日間という短い期間でしたが、本やネットでの情報だけでなく、実際にその場所で暮らしている人に出会って話すこと、その土地の雰囲気、食べ物を食べることでしかわからないことがあると実感しました。市場やスラムの匂い、暑さ、クラクションのけたたましい音、子どもたちの表情や人々のしぐさなど、得られた感覚はこのプログラムに参加したからこそ感じる事ができたと思います。これからさまざまな問題を考える際には、まずは自分でみる、感じるということを大切にしたいです。様々な場面でのヒアリングや視察を経験した後で教育 NGO プラサムの活動をふりかえってみると、やはり学習の場所をつくるということが大切なのではないと感じています。これは子どもの学習だけに限らず、多くの事柄に応用できるのではないのでしょうか。9日間本当に貴重な体験ができました。このプログラムに協力していただいたすべての人に感謝しています。



レッドフォートにて先生と参加者全員で

田中 綾香

(法学部 法律学科 3年次生)

インドで過ごした9日間は、考えさせられることばかりでした。インドでの生活によりやく慣れてきた3日目に、デリー大学に行き、カフェテリアでインドの学生たちと学校教育について議論する機会がありました。英語が聞き取りづらく、話の内容がほぼ理解できなかった為、ま

るで蚊帳の外に置かれているように感じました。また議論の後には学生たちと個人個人で話をしたのですが、やはり英語が聞き取れなかったこともあり、話が弾みませんでした。

会話している最中にインドの学生から質問されたことの中には、これまで自分が深く考えたことのない事柄や、自分なりの答えがなかったため答えられないものもありました。今まで難しい問題から目をそらしてじっくりと考えてこなかったからだ痛感し、とにかく悔しかったのです。ただ海外に行けて楽しかった、良い経験ができたという思いだけで終わるのではなく、自分や周りの出来事について考え、自分の行動を見直せたことが、このツアーでの一番の学びだと感じています。



教育プログラムのため、折鶴を折るメンバー

松原 誠智

(理工学部 数理情報学科 3年次生)

デリーに到着して翌朝の学校訪問から始まり、このプログラムでは予想を遥かに超える様々な職業、立場、環境、年齢の人々に出会い、話す機会がありました。まさに今のインドの人々の考え、日常の暮らしを知ることができました。出会った人は、私たちが遠く日本から来



インドの少年と掛け算の勉強を始める

た学生ということもあり、子どもも大人もみなさん大変友好的でした。

インドから始まった「プラサム」というNGO組織の教育支援活動は、「プレスクールプログラム」、「ライブラリープログラム」、「ラーニングセンター」と3つの異なる場면을視察することができ、子どもたちに折り紙を教えるという経験をすることができました。さらに家に実際に入れてもらい、子どもたちに算数の勉強を教えるというすばらしい経験もさせていただきました。子ども達から学ぶ姿勢や学ぶ喜びといった前向きな面を感じると共に、インドにおける初等教育の課題も考えることができました。急速に発展を遂げるインドでは、社会、特に教育から取り残された子どもたちを作らないということがいかに重要か、そして私たち日本人学生にできることは何なのかをじっくりと考えました。

神田 真菜実

(経営学部 経営学科 2年次生)

私はこのプログラムで初めてインドに行き、インドと日本との違いを多く感じました。まず、インドでの食事は日本とは全く違うものでしたが、どれも大変美味しかったです。インドでは、たくさんの活動をして、とても充実した日々を過ごすことができました。スラムでの視察、出稼ぎ労働者の方へのヒアリング、デリー大学に訪問して学生との交流、インドのNGO団体であるプラサムが実際に活動している現場での視察など、実に様々な活動をさせていただきました。これらの活動を通してたくさんの刺激を受けることができ、考え方や視野も広がり人として成



プラサムの活動拠点の一つ、3才~5才の子が学ぶプレスクールでの様子

長する機会になりました。特に、勉強できる環境のありがたさを強く感じ、インドで得たものは本当に大きいと思っています。インドで出会ったすべての人、そしてこのスタディツアーに関わってくださったすべての人に感謝して、今後もこの経験を活かして、頑張っていきます。

川下 諒

(政策学部 政策学科 1年次生)

私は、今回の夏季海外体験学習プログラムに参加しとてもよい体験ができたと思っています。人の言葉を聞くことや、誰かが撮った写真をみて物事を判断することは、簡単なことです。しかしそれは、確かな事実とは限りません。実際に自分で現地に行き、自分の目で確かめることが確実です。今回インドを自分の目で見ることができ、自分が今まで知っていると思っていた知識が間違っていたということが分かりました。そのことに気づくことができ本当によかったです。特に印象に残っていることはスラムに行ったことです。なかなかスラムの中に入ることができず、先生、通訳、スラムの方達が長い話し合いをされて、やっとスラムに住んでいる方に案内されて中に入ることができました。スラムの中は思った通り、道は衛生的ではなく、においも強かったです。案内されて進んでいくと、学校があり、その中で日本と同じように先生が子どもに勉強を教えていました。スラムの中に学校があったことに驚きました。若い先生たちはここで勉強を教えることができて幸せだと言っていたのが本当に印象的でした。自分が知らなかったことを自分の目で見ることもできた、とても意義深いスタディツアーでした。



スラムの中にある学校を見学、ヒアリングもした

引率教員講評 島根 良枝 (経済学部 准教授)

今夏実施した海外体験学習プログラム「教育 NGO の活動事例を通じて、インドの経済成長と社会発展について学ぶ9日間」の柱は、①成果を上げている教育 NGO Pratham の活動から学ぶ、②インドの経済成長と社会発展について知見を広げる、③両者を踏まえて自分たちに何ができるかを考える、の3つです。

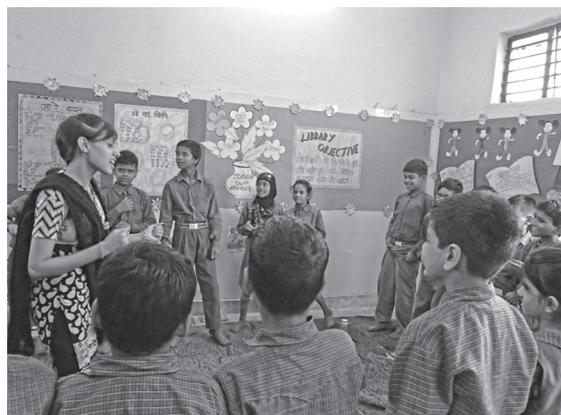
本学でも在学中にゼミやサークル活動、個人として途上国で教育支援に携わる学生が少なからずいるのは頼もしいものの、“効果のある支援を行う”という点でレベルアップを図る方向を探りかねているように見受けられます。私は、効果のある支援を行うには、現地の良い実践例から学ぶことと、その国の経済社会の幅広い文脈の中で支援相手を理解し方法を工夫することが不可欠だと考えています。良い実践例を知り、問題の根深さと対処の難しさを知ると、自分たちにできることは何もないのではないかとまずは無力感を感じるでしょう。それを一旦は経験した上で、現地での人々との関わりや問題の深刻さを念頭において、自分たちにできることを真剣に考え、行動につなげていって欲しいという思いで今回の海外学習体験プログラムを企画しました。



チャイで一服のひと時も

以下では3つの柱について、簡単に説明と報告をします。第1の成果を上げている教育 NGO とは、Pratham (プラサム) という組織です。1994年に設立されて以来、活動地域をムンバイからインド国内の多くの州に広げただけでなく、海外でも支援活動を行っています。その活動が世界的に評価されているのは、国連をはじめとする国際機関の教育支援が“子供たちを学

校へ”と就学を促す意味合いの強いものであるのに対し、プラサムの支援が“子供たちを学校へ、そして学びを”と、就学と学習成果の両者を重視した活動で成果を上げているためです。活動の特徴の中でも、独自の学習プログラムの開発、それらを実施するチューターの登用と訓練、学力データの把握が重要でしょう。チューターの動員には若い女性に活躍の場を与えるという副次的な成果もあり、データの把握は自らの活動の改善に資するだけでなく、政府や地域、家庭の理解を得つつ活動を進めることに役立っています。



プラサム・ライブラリープログラムでのチューターと生徒の様子

私たちはプラサムの事務所で彼らの組織的な運営の一端を垣間見、実際のプログラムの現場3カ所でプログラムの実施に携わるコーディネーターとチューター、協力関係にある学校等の関係者、さらに子供たちにヒアリングを行いました。スラム地域にある幼児教育の部屋は粗末でしたが、チューターの教える内容は、「緑という言葉と色は教えたけれど青はまだ教えていないので使わない」など、子供たちを戸惑わせないよう細かな配慮がなされたものでした。また学校内に設けられたライブラリープログラムの教室では、19歳の学生チューターの教えるスキルが非常に高いことに驚きました。学習内容の工夫もチューターの訓練も、プラサムが常に現場を視察しながら改善に努力しているものです。引率した学生たちも準備してきた折り紙を使ったプログラムを実際に行わせてもらい、“子供たちを学校へ”だけでなく“子供たちを学校へ、そして学びを”というプラサムの理念に沿った支援をするためには、内容の工夫やスキルの向上が必要と気付くことができました。

第2の柱、インドの経済成長と社会発展につ



私立一貫校でのヒアリングの様子

いて知見を広げるについては、出稼ぎ労働者の居住区、スラム地域、異なる所得階層の居住地域や商業地域をそれぞれ複数と、大学を1校訪れ、ヒアリングを行いました。詳しく書くのは別稿にしたいと思いますが、学生たちは、出稼ぎ労働者と彼らに部屋を貸している家主の仕事と暮らしぶり、公立校に通う子供たちと私立校に通う子供たちやデリー大学生の勉強への姿勢と将来へのイメージ、大卒ビジネスマンや無免許オートリキシャ運転手と非識字老人たちの仕事の来歴と将来の希望、インド政府の支援スキームに頼る困窮者と受給に賄賂を要求する役人といった、大きなコントラストをなす人々から多様な生の声を聴くことができました。いずれも、引率した学生たちにとってインドの経済社会を幅広く理解する上で役立つだけでなく、教育支援に限った視点からも、出稼ぎ労働者の子供たちの教育支援がとくに困難なことや、英語教育の取り入れを巡るジレンマといった重要な問題に気付かせてくれるヒアリングでした。

第3の自分たちに何ができるかを考えるという柱は、インド滞在中から帰国後の学習期間を経て、まだ継続中の課題です。最終日にプラサムの事務所でラップアップミーティングを行った際には、学生たちの熱心なフィードバックと帰国後の活動についての意欲をプラサムのス



水牛40頭を飼って家族を支えた老夫婦一家のご自宅でヒアリング

タッフも好意的に受け止めてくれました。引率した学生達には、帰国後直ぐに学期が始まり時間の制約もあるでしょうが、自分たちの受けたサポートをしっかり受け止めて、帰国前の熱意を今後に生かしてもらいたいと願っています。

最後に、半年以上にわたる事前準備から現地滞在中に様々な形でサポートしてくれたプラサムをはじめとする諸団体のスタッフと友人達、とくに Ms. Kakaji と Manisha、現地アシスタントの Pawan に、改めて感謝したいと思います。また学生の旅費を補助して下さった大学およびボランティア・NPO 活動センター、各種手配でお世話になったマイチケットの山田社長、岩井様、きめ細かくご対応下さったボランティア・NPO 活動センター上手さんにお礼申し上げます。



最終日にプラサム事務局でラップアップミーティングを実施

○海外体験学習プログラム／スリランカ民主社会主義共和国【夏季】

■参加学生	
横山 七海 (国際学部 国際文化学科 3年次生)	沓間 美奈 (文学部 歴史学科 2年次生)
白井 夢乃 (政策学部 政策学科 2年次生)	辻 奈都乃 (政策学部 政策学科 2年次生)
■テーマ、企画団体	
スリランカスタディツアー 歴史と暮らしに触れる旅 ～手づくり紅茶とホームステイ～ 特定非営利活動法人 JIPPO	

■行程 2017年8月31日(木)～9月8日(金) 9日間			
日程	時間	活動内容	場所
8月31日(木)	11:45	関西空港発 タイ(バンコク)乗り換え	コロンボ
	0:01	コロンボ着 【カトゥナーヤカコロンボ泊】	
9月1日(金)	午前	コロンボ市内見学	モラトワ
	15:00	モロトワに移動 ホームステイ先へ 【ホームステイ先宿泊】	
9月2日(土)	全日	ホームステイプログラム 【ホームステイ先宿泊】	モラトワ
9月3日(日)	10:00	ホームステイ先から集合 専用車にてハプタレーへ移動	ハプタレー
	夕方	オリパスプラザホテル着	
	夕食後	振り返り 【オリパスプラザホテル泊】	
9月4日(月)	午前	ハプタレー市立幼稚園訪問 グリーンフィールド農園見学 昼食 紅茶工場、プランテーション住宅見学	ハプタレー
	午後	茶摘み体験	
	夕方	オリパスプラザホテルに戻り	
	夕食後	振り返りの会 【オリパスプラザホテル泊】	
9月5日(火)		てづくり紅茶ワークショップ ワンゲディ・ペコ生産者との交流会 ローカルレストランで昼食 オリパスプラザホテルに戻り 振り返りの会 【オリパスプラザホテル泊】	ハプタレー
9月6日(水)	8:00	専用車にてキャンディへ移動 ローカルレストランで昼食	シーギリヤ
	午後	キャンディ市街見学(仏蘭寺、マーケットほか)	
	夕方	シーギリヤビレッジ着	
	夕食後	振り返りの会 【シーギリヤビレッジ泊】	
9月7日(木)	朝	シーギリヤロック登頂	シーギリヤ
	午後	コロンボへ移動 ダンプラ石窟寺院見学	コロンボ
	1:20	コロンボ空港に移動、出発 【機内泊】	
9月8日(金)		タイ(バンコク)乗り換え	
	15:55	関西国際空港着	

横山 七海

(国際学部 国際文化学科 3年次生)

スリランカの実際の生活に入り、働く人々と時間を過ごしたりすることで、その国の良さや温かさを肌で感じる事ができた。同時に様々な問題も目のあたりにする事ができた。それらを解決するには多くの課題をクリアし、たくさんの労力と時間を割く必要があるだろう。しかし大変な現実ばかりが溢れているわけではない。私はスリランカで笑顔と意欲に溢れたたくさんの人々に会った。彼らと出会い、異なる生活や文化を見て、何度も日本での自分の生活を振り返り考えた。日本での生活を反省し、一方ではスリランカも日本のようにしてほしいと感じた。知識や経験として、スリランカで学ぶことも多く有意義であったが、それと同じくらいに、今までの自分の生活や人生を振り返るきっかけが得られたことが大変貴重であったと思う。これからももっとスリランカのことを知りたいし、多くの人にこの国のことを知ってほしい。本当に魅力にあふれた国だった。



ホームステイでは血のつながりを超えて、家族の輪の中に迎え入れてもらい、温かさを感じさせてもらいました

沓間 美奈

(文学部 歴史学科 2年次生)

このツアーで、出会う人みんなが笑顔だったのがとても印象的だった。特に紅茶農園の労働者の人々は、厳しい環境にも関わらず笑顔で生活していた。また、仏歯寺やシーギリヤロックに行き、スリランカの歴史や文化について学べたことは、歴史学科に所属する自分にとって、これからの大学での学びや就職したあとに活かすことができるいい経験であった。海外での異文化交流というのは、日本を見直す機会となる。スリランカでの目に見える貧困を見たとき、自

分が日本の貧困について知らないことが多いと思った。スリランカのいいところを周りに広め知ってもらいたいと思うと同時に、日本の様々な問題について学び主体的に活動しなければならないと気付く事ができた。



紅茶の手作り体験。現地の人は、みんな丁寧に優しく教えてくれた

白井 夢乃

(政策学部 政策学科 2年次生)

初めてのスリランカでたくさんの貴重な経験をさせていただきました。主にホームステイとお茶摘みをしてその茶葉で紅茶を一から作るという日本ではできない経験ができました。スリランカの紅茶は日本にもかなり輸出されていて、ウバ州の茶葉などは日本人にはとても好まれているそうです。私たちもウバ州の紅茶農園を訪れて、紅茶を作る工場や労働者を訪問しました。彼らは3、4世帯で電球一つが灯るような薄暗い、六畳ほどしかない家に住んでいます。茶葉が取れず仕事がないときは出稼ぎに行くような厳しい生活を送っています。そんな生活にもかかわらず、皆心温かく、純粋で情のある方々ばかりでした。スリランカに行って一番思うのは、



ブライダルカメラマンのホストファーザーに同行させてもらい、ステキなカップルの幸せな場面に立ち会えました

スリランカの人たちの人柄の良さ、心のあたたかさです。もう一度訪れたい素敵な国でした。

辻 奈都乃

(政策学部 政策学科 2年次生)

海外体験学習プログラムでは、ホームステイ、手作り紅茶体験、労働者の方々の暮らしの見学、シーギリヤロック登頂など、すべてがかけがえない経験となった。その中でも特に手作り紅茶体験では、プランテーション労働者を自作農民化につなげる非常に大切な試みを間近でみる事ができた。もちろん私自身の学びになったのだが、労働者の方々にとって、今後新たな収入を得ることのできる重要な取り組みだった。また、日本ではなかなか気付くことの出来ない民族差別の問題など、悲しい現実も多く目にした。このプログラムを通して学んだ最も重要なことは、「心豊かに生きる」ということだ。たくさんスリランカの人々と出会う中で、熱心

に仕事に取り組み、周りの人との交流を楽しみ、今を大切に生きているということを言葉ではなく、心で感じる事ができた。経済力と心の豊かさは一致しないということだ。モノやカネに欲深くならず、本来の幸せを大切にしたいとスリランカでの体験を通して思った。



手作り紅茶で使用した白 ワンゲディベコ

○海外体験学習プログラム／フィリピン共和国【春季】

■参加学生	
東浦 茅乃 (文学部 日本語日文学科 3年次生)	辻谷 莉和 (文学部 仏教学科 2年次生)
谷 小波 (文学部 歴史学科 2年次生)	丸岡 和宏 (文学部 日本語日文学科 2年次生)
隅田美乃梨 (農学部 食品栄養学科 2年次生)	
■テーマ、企画団体	
この旅だから、出会えた。貧困と幸せ、被災地、戦争と平和 認定 NPO 法人アクセス - 共生社会をめざす地球市民の会	

■行程 2018年2月19日(月)～3月2日(金) 12日間			
日程	時間	活動内容	場所
2月19日(月)	9:55	関西国際空港 PR407発	ケソン市
	13:30	マニラ着 宿舎にて旅行中の諸注意の説明、オリエンテーション 【Park Villa Apartelle 泊】	
2月20日(火)	午前	ゴミ捨て場周辺コミュニティ トンド地区を歩道橋から見学	ケソン市
	午後	ショッピングモールで昼食、宿舎にてオリエンテーション 【Park Villa Apartelle 泊】	
2月21日(水)	午前	トンド地区の若者を招いて交流、ライフストーリーを聴く	ケソン市
	午後	ゴミ捨て場周辺都市貧困についてのオリエンテーション ディスカッション 【Park Villa Apartelle 泊】	
2月22日(木)	早朝	ケソン州アラバット島ベレーズへ向けて移動	ベレーズ
	午後	ベレーズ着、オリエンテーション 【Nantes Beach 泊】	
2月23日(金)	午前	物価調査、農家や漁師のお宅を訪問してお話を聞く 地域の若者達と交流 【Nantes Beach 泊】	ベレーズ
	午後		
2月24日(土)	午前	フェアトレード生産者との交流、商品生産体験	ベレーズ
	午後	旧日本軍の滑走路跡訪問、村での大交流会、ホームステイ 【ホームステイ】	
2月25日(日)	午前	フリータイム	ベレーズ
	午後	ディスカッション、さよならパーティー 【Nantes Beach 泊】	
2月26日(月)	午前	マニラに向けて移動	ケソン市
	午後	宿舎到着 【Park Villa Apartelle 泊】	
2月27日(火)	午前	ピナツボ火山被災地 (パンパンガ州) へ移動、ごみ処理施設訪問	ピナツボ地区
	午後	被災地の見学、住民との交流、ホームステイ 【ホームステイ】	
2月28日(水)	午前	旧日本軍による戦争被害者の方々との対話	ケソン市
	午後	戦跡「死の行進」記念碑見学、感想共有 【Park Villa Apartelle 泊】	
3月1日(木)	午前	戦跡 (サンチャゴ要塞など) を訪問	ケソン市
	午後	ディスカッション 【Park Villa Apartelle 泊】	
3月2日(金)	午前	空港へ移動	ケソン市
	14:25	マニラ空港 PR408発	
	19:15	関西空港着、関西国際空港にて解散	

東浦 茅乃**(文学部 日本語日文学科 3年次生)**

他人の目を気にしてなかなか自分から発信することができない。疑問はあるけど知らないことが恥ずかしくて人に教えることができない。私はそういう人間です。このツアーに参加したのはそんな自分の考えを崩す何かが発見できるのではないかと、自分を変えたい、と思ったからです。

いざフィリピンへ行き、そこで改めて感じた事があります。自分の当たり前は他人の当たり前ではないということ、そして、何かを始めるのに遅すぎるということはないということです。知りたい、学びたい。そう思ったとき、知らないことをバカにされるのを恐れ、諦めて知らないままでいるよりも、周りに何を言われてもいろんなことを知る方がより楽しく生きられると私は思いました。

私は1、2回生の2年間、なんとなく大学生活を過ごしてきました。現在4回生で、一般的には就職活動をする時期です。私は目標も夢もまだ定まっていません。しかし、これまで「なんとなく」生きてきたことにすごく後悔をしており、このツアーに参加したことで「もうなんとなく生きたくない」という思いが強くなりました。そしてもっといろんな人の話を聞きたいと思い、5月からフィリピンに留学することに決めました。自分のためにしたことが誰かのためになることがあります。これを読んでくださった方が何かを知ろうとするきっかけになれば嬉しく思います。



ホームステイ先で近所の子どもたちと撮った写真。子どもたちはみんなとても早起きで、朝6時から一緒に50メートル競走をしました。

辻谷 莉和**(文学部 仏教学科 2年次生)**

私は、このツアーに参加して本当に良かった。たくさんの人と出会い、話して、自分の中の概

念や価値観が良い意味で壊されて、また新しい自分に出会えた。日本ではありえない状況で生きる人たちの強い心や、どんなにつらくても笑顔でいることの大切さを学ばせてもらった。人として私になりたい人、そのものであった。フィリピンの人たちは笑顔の人が多。なぜ苦しい状況なのにそんなに笑顔でいられるのか疑問だった。現地のある人がその質問に答えてくれた。衝撃を受けたのだが、「貧困ということを手相手に知られたくない。問題があると思われたくない。」という答えが返ってきた。「笑顔は一種の化粧なんだ。」と言われて複雑な思いがした。このことを知ることができただけでもここに来た意味はあると思う。まだまだ私の知らないことが世界にはたくさんあって、無知であることがどれだけ怖いことか学んだ。これからも世界のこと、日本のことについて学ぶことをやめないでいたい。このツアーに参加して本当に良かった。



真ん中の女性がジェル。終始笑顔で私たちにたくさん話をしてくれた。芯が強く、かわいくて、面白くて、私が尊敬する一人である

谷 小波**(文学部 歴史学科 2年次生)**

ツアーで過ごした12日間は私の人生の中でダントツに濃い日々だった。現地で感じたフィリピンはこれまで持っていた固定概念を壊し、いかに自分の肌で感じる大切かを知った。フィリピンの人々の陽気な人柄や笑顔、そしてその裏に隠されたリアルな悩みや困難、涙を流さずには語れない壮絶なライフストーリー。これらはここに足を運ばないと絶対に知ることができなかったことである。私たちが無意識に行ってきた搾取によって、フィリピンの人々の暮らしを苦しめていたという矛盾に時に苦しみ、フィリピンの現状に頭を悩ませ、考えつづけた。フィリピンを取り巻く問題は簡単に答え

が出ることではないが、こうして1人でも多くの人が事実を知り、考え続けていくこと、またその輪を広げていくことがいかに大切かを痛感した。できることから行動を起こし、少しでもフィリピンの人々の暮らしが改善されていくことを願ってやまない。



小学校で交流した子どもたち

丸岡 和宏

(文学部 日本語日本文学科 2年次生)

今回、私が参加したスタディツアーは「貧困」と「戦争（歴史）」を主とするテーマとして構成されている。私は「貧困」に関する問題に興味を抱いた。「生活は豊かだが、心は貧しい。生活は貧しいが、心は豊か。」このような言葉を私は耳にしたことがある。一見すると生活の豊かさは心の豊かさに関係していると推測される。「心の豊かさ」を定義できないという問題はあるが、このような言葉が生まれる背景にはどのような要因があるのだろうか。今回のツアーで「都市貧困」と「農村貧困」を視察して要因を推測してみた。まず一つは「生活するために他人との協力が不可欠」という状況下での、コミュニケーションの多用と仲間意識の強化。もう一つは「子ども」が多いために庇護精神が増長される。これらが人間性に良い効果を与えているのではないかと考えられる。ケースバイケースであるという事実には異論の余地もないが、頭ごなしに否定できる言葉でもないという印象を受けた。



ゴミ捨て場周辺地区のひとつ、トンド地区の様子

隅田 美乃梨

(農学部 食品栄養学科 2年次生)

私がこのツアーに参加したのは、貧困問題やフィリピン人の戦争体験の話を通じて直接聞くことができるというところにひかれたからです。参加してみて想像を超える学びがたくさんありました。さらに、すてきな仲間に出会えました。世の中にはまだまだ学ばなければならないことがあって、今まで気づいていなかったことがもったいなかったと思いました。これからはもっと学びに貪欲に生きていきたいと思います。現地スタッフの方から「多くの人の心に橋を架けるような人になってください。」と声をかけられました。その言葉がとても心に染み、少しでもそんな人になりたいと思います。フィリピンでは、貧困に苦しむ人がたくさんいました。世界中の誰もが生きたいように生きていける、そんな平和な世界が実現するのはいつになるのかわかりません。でも、これからこのスタディツアーで感じたこと、学んだことを忘れずに、私にできることを見つけて行動できる人になろうと思っています。



ペレーズで家庭訪問させてもらった家族との写真

○海外体験学習プログラム／タイ王国【春季】

■参加学生	
松下 遼真(社会学部 社会学科 4年次生)	原田 真幸(国際学部 国際文化学科 3年次生)
沓間 美奈(文学部 歴史学科 2年次生)	須江香南子(経営学部 経営学科 2年次生)
空谷亜也衣(政策学部 政策学科 2年次生)	
■テーマ、企画団体	
復興タイツアー インド洋大津波被災地で東日本大震災7年目を迎える ツナミクラフト	

■行程 2018年3月6日(火)～3月13日(火) 8日間			
日 程	時 間	活 動 内 容	場 所
3月6日(火)	9:00	関西空港集合	プーケット
	11:00	タイ国際航空 TG623搭乗	
	15:45	バンコク国際空港到着	
	16:55	乗り継ぎで TG217搭乗	
	18:25	プーケット国際空港着 専用車にてホテルへ 【プーケットホテル泊】	
3月7日(水)	午前	プラートン寺院、ボリスポート 昼食	タレーノック村
	午後	クラブリから、タレーノック村へ移動 【タレーノック村にてホームステイ(1日目)】	
3月8日(木)	午前	マングローブ探検	タレーノック村
	午後	石けんづくり、屋根づくりなど、コミュニティーでの体験 【タレーノック村にてホームステイ(2日目)】	
3月9日(金)	午前	石けんづくり、屋根づくりなど、コミュニティーでの体験	タレーノック村
	午後	昼食後ナムケム村に移動児童養護施設にて交流会 【ナムケム村津波避難所兼ユースセンター 施設泊】	バンガー県ナムケム村
3月10日(土)	午前	インド洋大津波 タイ最大の被災地ナムケム村での学び 津波メモリアルパーク訪問 バンムアン町の旧避難所跡にて、さをり織り体験	バンガー県ナムケム村
	午後	昼食、こどもたちとの交流 タクアパ旧市街地アートプロジェクト見学 【ナムケム村津波避難所兼ユースセンター 施設泊】	
3月11日(日)	午前	東日本大震災7年目の式典	クラブリ
	午後	現地時間12時46分(日本時間14時46分)に合わせて式典を行う インスタレーションの展示作業 クラブリへ移動 【クラブリ ホテル泊】	
3月12日(月)		ふり返り、朝市体験 専用車にて空港へ移動	プーケット バンコク
	19:15	タイ国際航空 TG220搭乗	
	20:40	バンコク国際空港到着	
	23:15	乗り継ぎで TG622搭乗	
3月13日(火)	6:25	関西空港着空港到着後解散	関西空港

松下 遼真

(社会学部 社会学科 4年次生)

タイで一番勉強になったのは時間の使い方である。タレーノック村で生活していた時、やらなければならないこともなく、スマートフォンも使えないため、正直暇であった。また村ではバタバタしている人はおらず、動物の鳴き声と子どもたちの声だけが響いていた。その中でゆっくり本を読んだり、ぼんやり今日起こったことについて考えることが充実した時間につながったのである。タイの仏教では瞑想が重要視され、一般の人も瞑想をしてお寺に行くほどである。瞑想ほどではないが自分を冷静に見つめなおす時間が、自分のさらなる学びにつながるのだと今回の旅行で感じた。4月から社会人になり忙しくなるが、ゆっくりとした時間をつくり、心に余裕のある生活を送りたいと思った。



バティック（ろうけつ染め）の下絵を作成している

原田 真幸

(国際学部 国際文化学科 3年次生)

スマトラ島沖地震で被災したタイにて東日本大震災7年目を迎えて、私たちは震災についても一度深く考える機会を得ました。スマトラ島沖地震から14年目のタイには、現在多くの人が戻ってきており、様々な復興支援が実施されてきました。その中でも私たちが体験したのは、ろうけつ染めや石鹸づくりなど震災後に始まった作品づくりです。実際に体験することで作品を作ることに気持ちを安定させる効果があり、この活動が人々の心のケアに繋がっていることを実感できました。また今回のツアーを通して、様々な場面でタイの人々の心の暖かさに触れる機会がありました。私たちの出会ったタイの人々は、辛い過去を感じさせない素敵な笑顔で接してくれました。震災後のタイの現状とそこから日本が見習うべきところを少し知ることが

できたように思います。今回の経験を生かして日本での自分の生活を見直し、今後何か自分ができることはないか探してみたいと思います。



東日本大震災7年目式典での集合写真。後方に飾っている「LOVE&PEACE」の垂れ幕を作成した

沓間 美奈

(文学部 歴史学科 2年次生)

スタディツアー中の3月11日、東日本大震災発生時刻に子ども達と追悼式典に参加することにより、日本にいるときより深く震災について考えることができた。また外国の人たちがどれだけ東日本大震災を気にかけてくれていたのかを実感した。式典には児童養護施設にいる子どもたちや職員の方だけではなく、偶然そこに居合わせた日本人旅行者や外国人旅行者、現地の人々が参加してくれた。子どもたちの中には、東日本大震災のことをあまり知らない子もいたと思う。しかしみんな率先して式典の準備をしてくれ、一生懸命日本の歌を歌ってくれ、とても感動した。今回、スマトラ島沖地震の実際の被災地や被害の状況がわかる写真が置いてある場所をめぐることにより、自分が東日本大震災について何も知らなかったことを実感した。これから東日本大震災被災地に行って自分の目で確かめてこなければならないと思った。



児童養護施設の子どもたちとはパズルをしたりお絵かきをしたりして交流した

須江 香南子

(経営学部 経営学科 2年次生)

私たちが滞在したタレーノック村は、人と動物が共存しており、人口が250人という小さな村です。朝は鶏の「コケコッコー」という鳴き声で目が覚め、道路には牛が歩いています。そんなのどかな村ですが、2004年にスマトラ島沖地震で津波に襲われるという被害を受けました。そのような背景を持った場所で私は3日間ホームステイをして実際に村の暮らしぶりや仕事の体験をしました。

ろうけつ染めや、石けんづくり、屋根作りなど、どの体験も細かく難しい作業が多く、不器用な私はとても苦労しました。しかし、村の人は言葉が通じなくても身振り手振りで丁寧に教えてくださり、上手く出来るように手伝ってくれ、村の人の優しさに触れました。また、ホームステイでは言葉も通じない私たちに、いつも美味しいご飯をもてなしてくれました。この村で感じた人の優しさを忘れることなく、困っている人がいたら手をさしのべられる優しさを持つことを心がけて生活していきたいです。



屋根作りの写真です。これが2000枚ほど集まると家一軒分になります

杵谷 亜也衣

(政策学部 政策学科 2年次生)

今回のプログラムに参加して普段体験できないことをたくさん体験できました。その中でも現地の方たちと直接関わったタレーノック村でのホームステイと児童養護施設は印象的であり貴重な体験でした。タイ語、被災地訪問、持続可能性について学び、さらに今後より深く学んでいきたいと思っています。タイで生活してみても初めて、食事の面、生活のあらゆるところで、日本で自分がどれほどわがままに生きてきたかがわかりました。特に食事の面では、日本では食べたくないものは食べずに生活していたので、ホームステイをして目の前にあるものを食べざるを得ない今回の状況は実は自分にとって一番の試練でした。今後の学びにつながったことや、貴重な体験をしたことから、満足感、達成感があり、このプログラムに参加して本当によかったと感じています。



タレーノック村から船で、日本人が昔、暮らしていた島に行ってみた

事業名	体験学習プログラム報告会
日時	2016年度 春季：2017年 4月24日（月）17時30分～19時45分（深草） 2017年度 夏季：2017年10月19日（木）12時25分～13時05分（深草） 2017年度 春季：2018年 4月23日（月）17時30分～20時10分（瀬田） 2018年 4月27日（金）18時00分～19時20分（深草） 2018年 5月10日（木）12時25分～13時05分（深草）
場所	2016年度 春季：深草キャンパス 和顔館 アクティビティホール 2017年度 夏季：深草キャンパス 和顔館 アクティビティホール 2017年度 春季：瀬田キャンパス 6号館 プレゼンテーション室 深草キャンパス 和顔館 アクティビティホール 深草キャンパス 和顔館 アクティビティホール
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	2016年度春季：60名、2017年度夏季：78名、2017年度春季：144名

1. 経緯・目的

国内・海外の体験学習プログラムに参加した学生が、現地でのどのようなことを学び、考え、今後のボランティア活動や大学生活等にどのように活かしていくのかを発表する機会として、プログラムの一環で報告会を行っています。より多くの学生に本プログラムに関心をもってもらうため、誰でも報告を聴ける形で実施しました。

2. 概要

参加した学生が、プログラムごとに、プログラムでの体験を通じて学んだことをそれぞれのスタイルで報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、受け入れ先（スタディツアー企画団体）のNPOの方にも参加いただきました。

3. コーディネーター所感

プログラムに参加した学生は、各地での体験を通じて様々なことを感じ、気づきや学びを得て帰ってきました。そして、事後学習会を経て、この報告会に向けた準備でさらなる気づきを得たのではないのでしょうか。学んだことをアウトプットすることで、より深い学びになったのではないかと考えます。参加学生のこれからの活躍が期待されます。

〈報告者：國實 紗登美
(瀬田キャンパス コーディネーター)〉

	訪問地・参加者人数	テーマ
16年度 春季	台湾 参加者：8名	台湾の自然、歴史と市民活動～学生、市民との交流から考える～
	インド共和国 参加者：4名	農村開発の取り組み&子どもたちとふれあう旅
	タイ王国 参加者：3名	インド洋大津波被災地で東日本大震災6年目を迎える

16年度 春季	福井県おおい町 参加者：14名	ふくいエコ・グリーンツーリズム体験～限界集落・獣害・古民家活用を現地で学ぶ～
	福島県 参加者：15名	福島スタディツアー～福島「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～
17年度 夏季	スリランカ民主社会主義共和国 参加者：4名	スリランカスタディツアー歴史と暮らしに触れる旅～手づくり紅茶とホームステイ
	インド共和国 参加者：5名	教育NGOの活動事例を通じて、インドの経済成長と社会発展について学ぶ9日間
17年度 春季	フィリピン共和国 参加者：5名	この旅だから、出会えた。貧困と幸せ、被災地、戦争と平和
	タイ王国 参加者：5名	復興タイ体験ツアー インド洋大津波被災地で東日本大震災7年目を迎える
	滋賀県高島市 参加者：14名	人と人、人と自然～エコツーリズムを通して「つながり」を学ぶ～
	福島県 参加者：15名	福島スタディツアー～福島「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～

